

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	京都大学	拠点番号	J14
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名 (英訳名)	東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 —漢字文化の全き継承と発展のために— (East Asian Center for Informatics in Humanities)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:人文社会情報学〉(漢字文化)(文字論)(データベース)(歴史情報システム)(知識ベース)		
専攻等名	人文科学研究所、人間・環境学研究科共生文明学専攻、東南アジア研究所		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 高田 時雄 教授 他 12名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等:大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> 純然たる情報科学ではなく、従来の人文科学や社会科学でもない、新しい学際領域としての東アジア人文情報学を確立する。</p>
<p><本拠点の目的> 中国や日本をはじめとする東アジア諸国は長期にわたり漢字を媒体として、豊かな文化を育んできた歴史を有するが、そのような伝統文化を体現する東アジア人文学は21世紀の情報化社会において極めて大きなチャレンジを受けている。これまでのコンピュータ・サイエンスでは、漢字にやさしい環境作りが十分でなかったこともあるけれども、一方では主として漢字を用いる学問分野が新しい環境にみずからを適応させるべき努力を怠ってきた面も否定できない。新しい情報化された世界において、十全に伝統を保持し、新たな発展を目指すために、東アジア人文学を情報学によって新たに再編成し、そのための方法と理論の確立を目指す。</p>
<p><計画:当初目的に対する進捗状況等> 本計画は(1)東アジアの文字に関する人文情報学的研究、(2)漢字文献ナレッジベースの構築、さらに(3)東アジア人文情報学人材育成プログラムの三構成で計画されている。しかし本プロジェクトは「東アジア人文情報学」という新しい分野を切り開く試みであり、既成の専攻や専修に基盤を置くことができないという制約のため、特に教育プログラムにおいて若干の遅れが見られるなど、一部に不十分な点が存在することは否定できないが、全体としてはほぼ所期の計画を遂行出来ていると思われる。</p>
<p><本拠点の特色> 東アジア世界共通のメディアとしての漢字を軸に、東アジア共通の情報基盤を整備し、それを支えるべき人材育成を行って東アジア世界の相互理解の進展に貢献するとともに、伝統的な漢字文化を新たな時代に適応させ更なる発展をめざす。また従来の単に電子化されただけで閉じたシステムとしてしか機能しないデータベースではなく、より総合的な知の宝庫としてのナレッジベースの構築を目指すことで、豊かな内容を持つ漢字文化世界を如何に総体的に記述するかの試みを行う。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> まず21世紀において日本が学術の世界で国際的展望を見いだそうとするなら、東アジア世界にこそ最大限の注意を払う必要がある。また漢字を共通のコミュニケーション媒体とした東アジア世界独自のスタンダードを確立するために、漢字を使用する社会が本質的な部分で情報化と共存し貢献できる方途を模索すべきである。そのためにも新しい学際領域としての東アジア人文情報学の構築を我が国において進めることの意義は極めて大きい。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> ナレッジベースによって人文情報学的文化記述のモデルが提示され、関連分野の研究・教育に対する大きな貢献となる。東アジア諸言語(文字)に対する深い理解をもった情報学研究者や、情報リソースを活用でき、情報発信能力を備えた人文学研究者が養成される。またサマーセミナーを通じて幅広い層に人文情報学的発想が浸透する。漢字情報研究センターを東アジア人文情報学センターにグレードアップすることで、計画終了後も国際的な教育研究拠点および情報交換拠点として発展させることが出来、その活動を通じて研究成果を社会的に還元し得る。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 人文情報学の東アジア規模での国際化が進展するとともに、漢字にかかわる新しい情報技術が開発され、その社会的応用を通じて、情報化社会に少なからぬ利便をもたらす。また国際社会における情報規格の策定にも寄与できる。さらに漢字文化の担い手である東アジアの若手研究者の中から、多くの人文情報学の人材が育成されるとともに、漢字文化の国際的な広がりを確保できる。なによりも東アジア世界の学術情報交換環境が飛躍的に向上し、学術の国際交流に大きく貢献できる。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント) 東アジア地域に通底する文化として漢字に着目し、最新の情報学と連携しつつ漢字を基盤とする東アジア人文情報学を構築しようとする本プログラムの意義は大きく、採択以来の活動によってナレッジベース構築や研究国際交流などに進展があったことは評価できる。 しかし本拠点の目標を考慮するならば、これまでの蓄積の延長を超えて、情報学との連携を一層強化し、多字化の促進を図り、東アジア世界の各社会が共通して利用可能なスタンダードの確立を目指すことが望まれる。 そのために、学内外の連携の強化、および大学院教育との連携などにおいて、一層の努力が期待される。</p>